

# 自己意識的感情特性尺度作成の試み

——他者への自己意識的感情欲求特性、対人場面懸念、帰属特性との関係——

An attempt to construct scales of characteristic of self-conscious affect

: the relations to characteristic of request self-conscious affect of another person,  
anxiety about interpersonal situations, and characteristic of causal attribution.

榎 本 さ ち

Sachi Enomoto

(有田川町立田殿小学校)

米 澤 好 史

Yoshifumi Yonezawa

(和歌山大学教育学部心理学教室)

2007年10月3日受理

私たちは、日常生活で多くの人と関わり、その中で様々な感情を抱く。そのような感情の中には、共感や個人的苦痛、恥、罪責感、プライドや高揚感とあわせて、「自己意識的感情」と呼ばれる感情がある(Tangney&Fischer, 1995)。これらの感情は、いずれも自己との関わりで生じ、自己との関係で意識されることの多い感情である。また、これらの感情は、他の感情に比べて、ある場面で同時に感じられることが多く、それらを感じる当人にはその区別が難しいという特徴をもっている。

菊池・有光(2006)らは、この自己意識的感情に焦点を当て、12シナリオ(場面)・72項目からなる自己意識的感情尺度(KA-JiKoKan-12)を作成している。この尺度は、「对人的負債感」、「個人的苦痛」、「恥」、「罪責感」、「役割取得」、「共感的配慮」を測定している。この尺度では、自己意識的感情は、具体的な場面を離れては、意味をもたないということが指摘され、シナリオ(場面)形式のやり方が採用されているが、このシナリオ(場面)形式での評定にも、いくつかの問題が指摘されている(Tangney&Dearing, 2002)。一つは、具体的な場面の性質によって回答が左右され、場面ごとに違った反応が回答されることであり、もう一つは、取り上げる場面の数が制限され、具体的ではあっても、その感情が生起する場面をそこに広く含めることが難しいということである。確かに、場面に含まれる要素が影響を与えると、パーソナリティ特性としての自己意識的感情を捉えているとはいえない。しかし、完全に場面を離れてしまった場合もまた、自己意識的感情を生じさせることは困難である。

また、この自己意識的感情尺度では、測定されていない感情がある可能性があると考えられる。場面を設定したことによって、感情の種類がある程度制限されてしまったことがその一因であると考えられるが、自己意識的感情に、対人場面で生じる機会の少なくない「恥」や「心理的負担」などが含まれていないのは、問題であるといえるのではないだろうか。

さらに、このような自己意識的感情は、これまで向社会的行動の動機として考えられてきた。向社会的行動の動機として、共感(empathy)、個人的苦痛(personal distress)、恥(shame)や罪責感(guilt)が影響を与えているということは、先行研究によって様々な角度から研究されている。しかし、自己意識的感情の生起過程に焦点を当てているものはあまりない。では、このような自己意識的感情はどのようにして生起するのだろうか。自己意識的感情を生じさせる要因は何なのだろうか。

自己意識的感情は、自己との関わりの中で生じる感情であるが、その自己には、自己と関わる他者の存在が大きな影響を与えている。私たちは、他者との関わりの中で、「自分だったら〇〇と思うから、相手もきっと〇〇と思っているだろう」、「相手は××な人だから、きっとこんな風に思っているに違いない」など、自分に置き換えたり、相手の立場に立ったりして、相手の気持ちを推測する。その推測の仕方は、個々によって異なり、人によってはあまり推測がなされないこともある。また、相手の感情を推測すると同時に、その推測とは別に、「相手にはこう思っていて欲しい」という、相手の感情に対する欲求も生じる。この相手の感情に対する欲求は、相手が自己意識的感情を抱くような場面で意識され、自己が同様の場面に陥った際に抱く感情に影響を与えと考えられる。例えば、「相手が失敗した時に、自分に対して申し訳ない気持ちになって欲しいと思う人は、相手に共感を求めているので、自分が失敗した時にも相手に共感し、相手に対して申し訳ない気持ちになる」。それに対して、「相手が失敗した時に恥ずかしい気持ちになって欲しいと思う人は、自分が失敗した時には、恥ずかしい気持ちになりたくないで、自分のせいだと思いたくない」、というような場合である。このように、自己意識的感情と他者の感情への欲求は、一致する場合もあれば、全く異なっている場合もある。しかし、そこには何らかの関係性があると推測される。

また、自己との関わりの中で生じ、自己との関係の中で意識されることが多い自己意識的感情には、自己に対する期待や評価が影響を与えていることが予測される。例えば、自己に対する期待が高ければ高いほど、失敗したときに落ち込むであろうし、自己に対する評価をあえて低くしておけば、失敗したときにもそれほど落ち込まずに済むかもしれない。また、相手との関係性も、自己意識的感情に影響を与えている可能性がある。相手のことを気に入っている場合、失敗によって自分が嫌われないか気になったり、相手がどう思っているかが気になったりするだろう。さらに、相手が自分にどのくらい期待していたのかによって、その後失敗したときに自分を責める感情が生じたり、逆に仕方ないと諦める感情が生じたりするであろう。このように、自己に対する評価や期待、そして成果、また他者による評価や期待、成果や受容、他者に対する評価や、他者の受容への期待などが、自己意識的感情に影響を与えていると考えられるのである。

さらに、原因帰属も自己意識的感情に影響を与えるものの一つであると考えられる。例えば、自分のせいで失敗したのではないと思う人は、その原因が自分以外のところにあると感じているであろうし、自分の責任を強く感じている人には、失敗の原因を自分自身の中に探すであろう。Weinerら(1971)は「人は達成に関連した事象の結果を解釈し予測するために帰属の4要素を用いる」として、能力(ability)、努力(effort)、課題の困難度(task difficulty)、運(luck)をあげ、さらにこれらを特徴づけ、分類するために、統制の位置(内的・外的)、安定性(安定・不安定)の2つの原因次元を設定している。この理論では、成功・失敗に対して形成された原因帰属は、その帰属因の各原因次元上での特徴に応じて、期待や感情に異なった影響を与え、この期待と感情を媒介として後続の行動が決定されると考えられている。また、感情反応への帰属の影響については、原因の位置次元のみならず、統制の可能性次元や安定性次元も、特定の感情反応に影響することが研究を通して明らかになってきている(奈須, 1988)。例えば、うしろめたさは、自分にとって統制可能な要因に帰属した時に経験され、不十分な努力ゆえの失敗は、うしろめたさの感情を引き起こし、絶望感やあきらめは、ネガティブな結果を安定した要因に帰属した場合に引き出されることが示されている。このように、帰属の感情への影響が明らかにされていることから、帰属意識が感情の一部である自己意識的感情に影響を与えていると考えられるのである。

以上のような考えを踏まえ、本研究では、パーソナリティ特性として自己意識的感情を捉え、その生起要因も含めて明らかにすることを目的とする。そのために、特にネガティブな自己意識的感情に焦点を当て、場面が与える影響を排除するため、場面をネガティブ

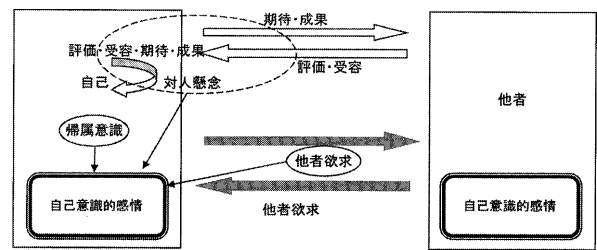


Figure. 1 自己意識的感情と他者への欲求、対人懸念、帰属意識との関係

な自己意識的感情が生じやすいと考えられる「失敗場面」としてのみ設定し、(1)“恥”や“心理的負担”を含めた新たな自己意識的感情尺度を作成し、(2)そのようなネガティブな自己意識的感情に影響を与えようと考えられる他者へのネガティブな自己意識的感情欲求との関係、(3)自己や他者への評価や期待、成果や受容に対する懸念との関係、そして(4)帰属意識との関係を総合的に検討していく(Figure. 1)。

## 1. 方法

**1.1. 調査対象および手続き** 和歌山大学学部学生および和歌山大学大学院大学院生計201名(男子109名、女子92名)、平均年齢20.4歳を対象に質問紙を配布し、回答を求めた。

### 1.2. 測定内容

#### 1.2.1. 自己意識的感情特性

菊池・有光(2006)らの自己意識的感情尺度(KA-Ji-KoKsn-12)と、聞き取りを参考に、53項目からなる尺度を作成した。教示は、「日常生活において、私たちは多くの人と関わります。そのように人と関わる中で、私たちは失敗することがしばしばあります。あなたがそうした対人場面において何か失敗をした時、どのような反応をしがちなのか、どう感じたり考えたりすることが多いのか回答してください。」とし、評価は「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(7点)」の7件法を用いた。

#### 1.2.2. 他者への自己意識的感情欲求特性

“自己意識的感情特性”に対応する形で、53項目からなる尺度を作成した。教示は、「日常生活において、私たちは多くの人と関わります。そのように人と関わる中では、あなた以外の人が失敗することがあります。相手が対人場面においてあなたの前で何か失敗をした時、相手にどう思って欲しいのか、また、どう感じてほしいことが多いのか回答してください。」とし、評価は、自己意識的感情特性と同様に7件法を用いた。

#### 1.2.3. 自由記述

教示は、「あなたがこれまで経験した中で、最もいやだった失敗場面はどんな場面ですか？できるだけ詳しく教えてください。」とし、自由記述で回答を求めた。

#### 1.2.4. 対人場面懸念

対人場面における相手の自己に対する懸念、自己の

相手に対する懸念、自己の自己に対する懸念、相手への自己の期待に対する懸念に関する14項目からなる尺度を作成し、教示は「あなたは人と関わるときに以下のことをどの程度気にしますか？」とし、評価は、「全く気にしない(1点)」から「非常に気にする(7点)」の7件法を用いた。

### 1.2.5. 帰属特性

(成人用一般的)Locus of Control尺度(鎌原・樋口・清水,1982)を参考に28項目からなる尺度を作成した。教示は「以下の文章を読んで、あなたがそれらの意見について、どのように思うか、最も当てはまるところに○をつけて下さい。」とし、評価は、「全くそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(7点)」の7件法を用いた。

## 2. 結果

### 2.1. 各尺度の因子分析と信頼性

#### 2.1.1. 自己意識的ネガティブ感情の因子分析と信頼性

自己意識的ネガティブ感情に関する53項目で、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

因子数を決定するに当たっては、主成分分析による固有値の変動に注目しながら、初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから、6因子を抽出した(Table. 1)。

第1因子は、「相手は一体どんな気持ちなのだろうと思う」、「相手はどうしたいと思っているのだろう」などの14項目が負荷しており、「共感」と命名した。

第2因子は、「落ち込む」、「不安になる」などの12項目が負荷しており、「心的負担」と命名した。

第3因子は、「八つ当たりしたいと思う」、「投げやりに考えてしまう」などの6項目が負荷しており、「自己防衛」と命名した。

第4因子は、「恥ずかしいと思う」、「赤っ恥をかいってしまったと思う」などの5項目が負荷しており、「恥・負債感」と命名した。

第5因子は、「自分はダメな人間だと思う」、「自分は人と比べて情けない人間だと思う」などの3項目が負荷しており、「劣等感」と命名した。

第6因子は、「どうやって責任を取ろうかと思う」、「責任を感じる」などの4項目が負荷しており、「罪責感」と命名した。

なお、 $\alpha$ 係数は第1因子が.92、第2因子が.90、第3因子が.72、第4因子が.78、第5因子が.90、第6因子が.60であった(以下、 $\alpha$ 係数は小数点第3位で四捨五入)。

#### 2.1.2. 自己意識的ネガティブ感情の因子分析と信頼性

他者への自己意識的ネガティブ感情欲求に関する53項目で、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子数を決定するに当たっては、主成分分析による固有値の変動に注目しながら、初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから、6因子を抽出した。

第1因子は、「八つ当たりしたいと思って欲しい」、「消えてしまいたいと思って欲しい」などの11項目が負荷しており、「自暴自棄欲求」と命名した。

第2因子は、「相手はどう思っているのかと思って欲しい」、「相手はいやな気持ちになったのではないかと

Table. 1 自己意識的感情特性の因子分析結果  
(主因子法-Promax回転)

項目内容	FI	FII	FIII	FIV	FV	FVI	共通性
15 相手は一体どんな気持ちなのだろうと思う	.890	-.106	-.092	-.156	.162	-.014	.692
27 相手はどうしたいと思っているのだろうと思う	.860	.113	.204	-.267	-.178	-.080	.636
9 相手は辛い思いをしたのではないかとと思う	.806	-.283	.133	-.085	.054	.183	.617
36 相手はどう思っているのかと思う	.775	.175	-.088	.011	-.039	-.129	.686
1 相手の立場に立って考えなくてはと思う	.728	-.146	.076	-.326	-.059	.225	.522
38 相手は傷ついているのではないかとと思う	.726	.054	.074	-.166	.014	.226	.630
4 相手はいやな気持ちになったのではないかとと思う	.647	-.270	-.038	.239	.185	.124	.600
5 相手は何を考えているのかと思う	.625	.067	-.027	-.020	-.021	-.141	.375
49 相手が怒っていないか気になる	.595	.234	-.055	.167	.001	-.200	.624
42 相手に悪いことをしたと思う	.561	.091	-.032	.101	-.073	.202	.534
30 相手に嫌われていないか気になる	.543	.206	-.135	.264	.059	-.176	.664
34 相手が気を悪くしていないか気になる	.489	.257	-.001	.215	-.133	.033	.575
50 相手はきつとがっかりするだろうと思う	.472	-.035	.042	.291	.144	.088	.530
18 相手に面目ないと思う	.411	-.045	-.037	.400	.099	.239	.632
23 相手は気の毒だと思う	.411	.018	.238	.076	.075	.118	.358
32 落ち込む	-.012	.796	-.151	.058	-.033	.051	.645
29 不安になる	-.001	.759	-.028	.057	-.040	.018	.600
39 落ち着かなくなる	.023	.733	-.034	-.066	.055	.154	.599
44 思い悩む	.030	.709	-.078	-.166	.236	.058	.574
48 辛くなる	.084	.688	-.140	-.216	.151	.097	.484
37 泣きたくなる	-.089	.642	.081	-.082	.159	.073	.490
22 傷つく	.054	.604	.134	-.061	-.066	.082	.401
31 ハラハラする	.099	.583	.160	.041	.043	-.029	.531
24 ドキドキする	-.084	.556	.138	-.010	.002	.023	.335
41 全てを投げ出したいと思う	-.019	.553	.235	-.215	.378	-.084	.641
33 焦る	-.101	.502	.058	.261	-.036	.175	.480
16 後悔する	.009	.484	-.114	.250	-.070	.141	.451
10 何も考えられなくなる	-.259	.375	.138	.137	.145	-.052	.302
17 いたたまれなく思う	.177	.273	.043	.195	.055	-.052	.306
7 八つ当たりしたいと思う	-.022	.019	.714	.051	-.129	.013	.458
19 自分のせいではないと思う	.227	-.078	.601	-.090	-.180	-.355	.476
47 投げやりに考えてしまう	-.102	.252	.559	.009	.158	-.062	.568
43 何とかして正当化しようと思う	.138	-.025	.527	.189	-.075	-.100	.328
8 人からバカにされると思う	-.085	-.053	.462	.458	.177	.032	.531
11 イライラする	.072	.048	.455	-.116	.026	.067	.235
12 言い訳しようと思う	.015	-.223	.441	.316	.134	-.008	.301
6 こんなはずではないと思う	.006	.266	.406	.039	-.117	-.001	.254
13 恥ずかしいと思う	-.176	-.112	.045	.757	.115	.197	.516
25 赤っ恥をかいってしまったと思う	-.246	.121	.240	.569	.086	.206	.522
28 相手に負い目を感じる	.331	-.130	.114	.531	.141	-.022	.545
53 相手に怒られるのではないかとと思う	.103	.257	.032	.400	.163	.047	.562
2 相手にすぐに謝らなければと思う	.076	.066	-.068	.369	-.015	.344	.367
52 きまり悪く感じる	.117	.231	-.042	.321	.106	-.026	.359
26 自分はダメな人間だと思う	.094	.147	-.158	.176	.759	-.134	.769
51 自分は人と比べて情けない人間だと思う	.122	.092	-.021	.219	.683	-.051	.750
14 自分は人より劣った人間だと思う	-.031	.093	-.026	.336	.616	-.027	.683
46 消えてしまいたいと思う	-.073	.373	.160	-.009	.525	-.033	.660
35 次は気をつけようと思う	-.062	.182	-.036	.345	-.402	.545	.486
40 どうやって責任を取ろうかと思う	.102	.339	.088	.076	-.144	.527	.533
20 責任を感じる	.145	.058	-.075	.117	.153	.526	.502
21 相手に申し訳ないと思う	.271	.075	-.102	.220	.073	.446	.571
45 何とかしなくてはと思う	.194	.385	.037	.026	-.172	.392	.462
3 人のせいにしようと思う	-.016	-.036	.338	.309	-.002	-.352	.334
固有値	10.628	12.140	4.226	9.198	6.782	4.197	

思っている」などの8項目が負荷しており、“共感欲求”と命名した。

第3因子は、「申しわけなく思っている」、「責任を感じて欲しい」などの7項目が負荷しており、“罪責感欲求”と命名した。

第4因子は、「ハラハラして欲しい」、「ドキドキして欲しい」などの9項目が負荷しており、“心的負担欲求(感情的苦痛)”と命名した。

第5因子は、「赤っ恥をかいてしまったと思って欲しい」、「人からバカにされると思って欲しい」などの4項目が負荷しており、“劣等感欲求”と命名した。

第6因子は、「怒っていないか気にして欲しい」、「気を悪くしていないか気にして欲しい」の2項目が負荷しており、“懸念欲求”と命名した。

なお、 $\alpha$ 係数は第1因子が.92、第2因子が.90、第3因子が.86、第4因子が.91、第5因子が.84、第6因子が.70であった。

### 2.1.3. 対人場面懸念の因子分析と信頼性

対人場面懸念に関する14項目で、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。因子数を決定するに当たっては、主成分分析による固有値の変動に注目しながら、初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから、2因子を抽出した(Table. 2)。

Table. 2 対人場面懸念の因子分析結果  
(主因子法-Promax回転)

項目内容	FI	FII	共通性
8 自分がどれだけ出来たかと思っていたか	.923	-.229	.623
7 自分が今まで同じような状況でうまくやれたかどうか	.874	-.165	.600
12 自分がプライドを持っている事柄かどうか	.660	.018	.451
11 相手が自分に期待しているかどうか	.512	.324	.588
13 自分に期待して欲しいかどうか	.505	.300	.547
5 相手に期待しているかどうか	.423	.175	.308
9 自分が人とうまく関わる性格かどうか	.382	.190	.278
1 自分を気に入って欲しいかどうか	-.140	.751	.443
14 相手が自分を気に入っているかどうか	-.094	.743	.468
4 相手が自分を高く評価しているかどうか	.135	.681	.604
10 相手を気に入っているかどうか	-.116	.629	.312
6 自分を高く評価して欲しいかどうか	.316	.528	.600
2 自分がどれだけ出来たか	.171	.369	.250
3 相手を高く評価しているかどうか	.252	.356	.310
固有値	4.790	4.630	

第1因子は、「自分がどれだけ出来たかと思っていたか」、「自分が今まで同じような状況でうまくやれたかどうか」などの7項目が負荷しており、“期待・成果”と命名し、第2因子は、「自分を気に入って欲しいかどうか」、「相手が自分を気に入っているかどうか」などの7項目が負荷しており、“評価・受容”と命名した。

なお、 $\alpha$ 係数は第1因子が.85、第2因子が.83であった。第1因子と第2因子の因子間相関は、.666であった。

### 2.1.4. 原因帰属の因子分析と信頼性

原因帰属に関する28項目で、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子数を決定するに当たっては、主成分分析による固有値の変動に注目し

ながら、初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから、5因子を抽出した(Table. 3)。

第1因子は、「あなたは、努力すれば、だれとでも友人になれると思いますか。」、「あなたは、いっしょけんめい話せば、だれにでも、わかってもらえると思いますか。」などの4項目が負荷しており、“努力”と命名した。

第2因子は、「あなたが努力するかどうかと、あなたが成功するかどうかとは、あまり関係がないと思いますか。」、「あなたは、自分の身におこることを、自分の力ではどうすることもできないと思いますか。」などの4項目が負荷しており、“無力感”と命名した。

Table. 3 帰属特性の因子分析結果  
(主因子法-Promax回転)

項目内容	FI	FII	FIII	FIV	FV	共通性
9 あなたは、努力すれば、だれとでも友人になれると思いますか。	.698	.023	.017	.197	-.168	.432
16 あなたは、いっしょけんめい話せば、だれにでも、わかってもらえると思いますか。	.608	.080	-.034	-.005	.074	.386
23 あなたは、努力すれば、りっぱな人間になれると思いますか。	.583	-.106	-.068	-.041	.145	.430
11 あなたは、努力すれば、どんなことでも自分の力でできると思いますか。	.581	.043	.158	-.129	-.182	.396
5 あなたは、どんなに努力しても、友人の本当の気持ちを理解することはできないと思いますか。	-.372	.166	.043	-.043	.005	.174
12 あなたが努力するかどうかと、あなたが成功するかどうかとは、あまり関係がないと思いますか。	.014	.673	-.101	-.058	-.021	.409
22 あなたは、自分の身におこることを、自分の力ではどうすることもできないと思いますか。	-.006	.480	.142	.087	.088	.339
13 あなたは、困難な問題につかると、よい結果は生まれないと思いますか。	-.196	.421	.201	.034	.192	.388
6 あなたが、幸福になるか不幸になるかは、あなたの努力しだいだと思いますか。	.314	-.410	.130	-.182	.119	.427
21 あなたは、何でも、なりゆきにまかせるのが一番だと思いますか。	.062	.398	-.088	.030	-.016	.152
27 あなたが将来何になるかについて考えることは、役に立つと思いますか。	.331	-.344	.003	.087	.022	.234
19 あなたの人生は、ギャンブルのようなものだと思いますか。	-.122	.232	.021	.139	-.093	.131
10 あなたは、有能でなければ、自分の一生を思いどおりに生きることができないと思いますか。	-.156	-.112	.702	.088	.046	.508
8 あなたは、能力があれば、どんなことでも自分の力でできると思いますか。	.295	.137	.578	-.040	-.139	.431
15 あなたが有能かどうかと、あなたが成功するかどうかとは、あまり関係がないと思いますか。	.136	.417	-.564	-.099	.062	.343
24 あなたは、能力があれば、りっぱな人間になれると思いますか。	.252	.023	.495	.078	.067	.356
25 あなたは、能力がなければ、友人の本当の気持ちを理解することはできないと思いますか。	-.241	.250	.373	-.072	.034	.311
20 あなたは、たいていの場合、自分で決断した方が、よい結果を生むと思いますか。	-.038	-.005	.313	-.205	-.269	.157
2 あなたは、自分の一生を思いどおりに生きることができると思いますか。	.260	.234	.038	-.537	.059	.416
26 あなたの将来は、運やチャンスによって決まると思いますか。	.116	.061	.116	.524	.056	.307
17 あなたの人生は、運命によって決められていると思いますか。	.201	.263	.068	.518	.085	.425
28 あなたは、自分の人生を、自分自身で決定していると思いますか。	.279	.013	-.008	-.426	.110	.331
1 あなたが、幸福になるか不幸になるかは、あなたの能力しだいだと思いますか。	-.033	-.224	.224	-.413	.219	.354
3 あなたが、幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まると思いますか。	-.025	.194	.211	.248	.125	.235
14 あなたの将来は、直面する問題によって決まると思いますか。	-.040	.015	.028	.028	.705	.510
7 あなたの人生は、直面する問題の困難さによって決められていると思いますか。	-.087	.032	-.063	-.073	.682	.418
18 あなたは、自分の身におこることは、自分のおかれている環境によって決定されていると思いますか。	.106	-.117	-.033	.392	.423	.343
4 あなたは、人生に、乗り越えられる程度の低い壁しかなければ、誰もが成功すると思いますか。	.067	.049	.206	-.054	.250	.166
固有値	2.650	2.294	2.248	2.065	1.934	

第3因子は、「あなたは、有能でなければ、自分の一生を思いどおりに生きることができないと思いますか。」「あなたは、能力があれば、どんなことでも自分の力でできると思いますか。」などの3項目が負荷しており、「能力」と命名した。

第4因子は、「あなたは、自分の一生を思いどおりに生きることができると思いますか。」「あなたの将来は、運やチャンスによって決まると思いますか。」などの5項目が負荷しており、「運」と命名した。

第5因子は、「あなたの将来は、直面する問題によって決まると思いますか。」「あなたの人生は、直面する問題の困難さによって決まると思いますか。」などの3項目が負荷しており、「課題の困難さ」と命名した。

なお、 $\alpha$ 係数は第1因子が.72、第2因子が.60、第3因子が.59、第4因子が.58、第5因子が.61であった。

## 2.2. 自己意識的ネガティブ感情尺度、他者への自己意識的ネガティブ感情欲求尺度、対人場面懸念尺度、原因帰属尺度間の相関

自己意識的ネガティブ感情6因子間の相関は「自己防衛／罪責感」以外の全ての因子間で有意な正の相関が見られた。

自己意識的ネガティブ感情6因子と他者意識的ネガティブ感情6因子の相関は、「共感／共感欲求」、「共感／罪責感欲求」、「共感／懸念欲求」、「心的負担／罪責感欲求」、「自己防衛／自暴自棄欲求」、「自己防衛／心的負担欲求」、「自己防衛／恥・劣等感欲求」、「自己防衛／懸念欲求」、「恥・負債感／心的負担欲求」、「罪責感／罪責感欲求」のそれぞれの因子の間に有意な正の相関が見られた。また、「罪責感／自暴自棄欲求」、「罪責感／恥・劣等感欲求」の間には、有意な負の相関が見られた。

自己意識的ネガティブ感情6因子と対人場面懸念の相関は、自己意識的ネガティブ感情6因子と気にするか2因子の全ての因子の間に有意な正の相関が見られた。

自己意識的ネガティブ感情6因子と、原因帰属5因子の相関は、「共感／能力」、「心的負担／能力」、「心的負担／運」、「自己防衛／無力感」、「自己防衛／能力」、「恥・負債感／無力感」、「恥・負債感／能力」、「恥・負債感／運」、「劣等感／無力感」、「劣等感／能力」、「劣等感／運」、「罪責感／努力」のそれぞれの因子の間に、有意な正の相関が見られた。

次に、他者への自己意識的ネガティブ感情欲求6因子間の相関は、全ての因子の間に有意な正の相関が見られた。

他者への自己意識的ネガティブ感情欲求6因子と気にするか2因子の相関は、「自暴自棄欲求／期待・成果」、「自暴自棄欲求／評価・受容」、「心的負担欲求／評価・受容」、「恥・劣等感欲求／評価・受容」では相

関が見られなかったが、それ以外の因子の間では、正の相関が見られた。

また、他者への自己意識的ネガティブ感情欲求6因子と原因帰属5因子の相関は、「自暴自棄欲求／無力感」、「自暴自棄欲求／能力」、「罪責感欲求／努力」、「心的負担欲求／無力感」、「心的負担欲求／能力」、「恥・劣等感欲求／無力感」、「恥・劣等感欲求／課題」、「懸念欲求／能力」、「懸念欲求／課題」のそれぞれの因子の間に、有意な正の相関が見られた。

対人場面懸念2因子の間には、有意な正の相関が見られた。

対人場面懸念2因子と原因帰属5因子の相関は、「期待・成果／努力」、「期待・成果／能力」、「期待・成果／課題の困難さ」、「評価・受容／努力」、「評価・受容／能力」、「評価・受容／課題の困難さ」のそれぞれの因子の間に、有意な正の相関が見られた。

原因帰属5因子間の相関は、「努力／能力」、「無力感／能力」、「無力感／運」、「能力／課題の困難さ」のそれぞれの因子の間に有意な正の相関が見られたのに対し、「努力／無力感」、「努力／運」の因子の間には、有意な負の相関が見られた。

## 2.3. 重回帰分析

自己意識的ネガティブ感情の6つの因子「共感」、「心的負担」、「自己防衛」、「恥・負債感」、「劣等感」、「罪責感」をそれぞれ目的変数とし、他者への自己意識的ネガティブ感情6因子、対人場面懸念の2因子、原因帰属の5因子、計13因子をそれぞれ説明変数として、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

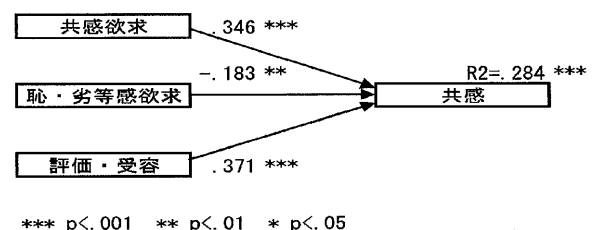


Figure. 2 “共感”重回帰分析結果

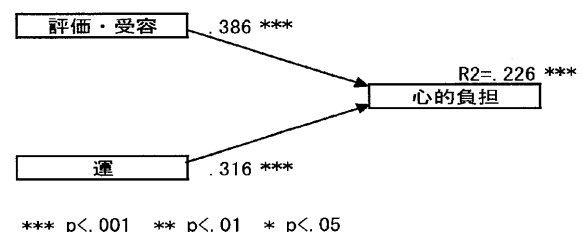


Figure. 3 “心的負担”重回帰分析結果

重回帰分析の結果、共感は「共感欲求」と「恥・劣等感欲求」、「評価・受容」から影響を受けており (Figure. 2)、心的負担は、「評価・受容」と「運」の影響を受けていることが明らかになった (Figure. 3)。

また、自己防衛は“自暴自棄欲求”と“期待・成果”、“無力感”の影響を受けており (Figure. 4)、恥・負債感 は“評価・受容”、“期待・成果”と“運”、“能力”の影響を受けていた (Figure. 5)。さらに、劣等感は“評価・受容”、“無力感”、“運”、“能力”の影響を受けており (Figure. 6)、罪責感は、“自暴自棄欲求”、“罪責感欲求”、“評価・受容”、“努力”の影響を受けていることも明らかになった (Figure. 7)。

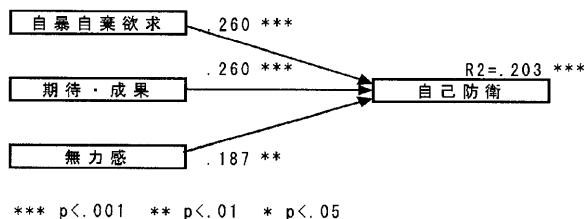


Figure. 4 “自己防衛”重回帰分析結果

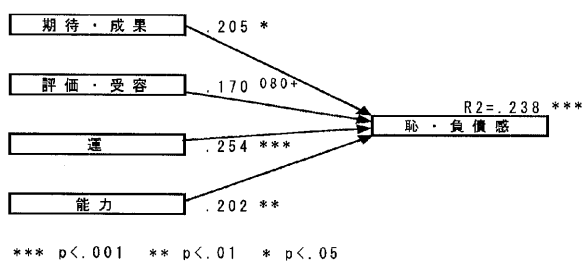


Figure. 5 “恥・負債感”重回帰分析結果

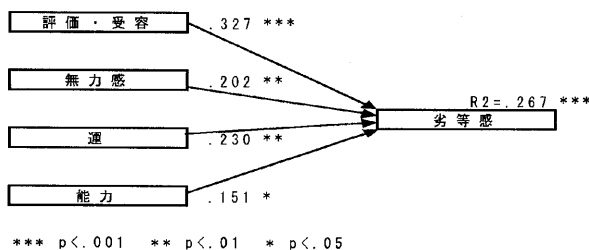


Figure. 6 “劣等感”重回帰分析結果

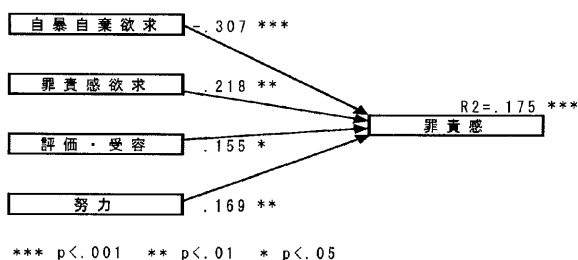


Figure. 7 “罪責感”重回帰分析結果

つまり、重回帰分析の結果、「自暴自棄欲求」が「自己防衛」に正の影響を与えており、「罪責感」には負の影響を与えていることが明らかになった。また、「共感欲求」は「共感」に、「罪責感欲求」は「罪責感」に正の影響を与えており、「恥・劣等感欲求」は「共感」に負の影響を与えていた。

「期待・成果」は「自己防衛」と「恥・負債感」に影響を与えており、「評価・受容」は「共感」と「心的負担」、「劣等感」、「罪責感」に影響を与えていた。

「努力」は「罪責感」に、「無力感」は「自己防衛」や「劣等感」に、「能力」は「恥・負債感」、「劣等感」に、「運」は「心理的負担」と「劣等感」、「負債感」にそれぞれ影響を与えているということも明らかになった。

## 2.4. 自由記述

### 2.4.1. 自由記述の分類

自由記述は、結果を内容と場面で2通りに分類した。内容による分類では、それぞれの失敗場面が何による失敗であるかを基準に、①アルバイト・仕事、②勉学、③スポーツ、④発表・演技、⑤部活(スポーツ・発表・演技以外)、⑥事故・器物損壊、⑦友人、⑧家族、⑨公衆の6つに分類した。

場面による分類では、(i) 公的空間か私的空間か、(ii) 自分と相手の人数が1対1か1対多数か自己内か、(iii) 行為者が自己か他者か、という3つの基準を設け、①公的空間・1対多数・行為者(自己)、②公的空間・自己内・行為者(自己)、③私的空間・1対多数・行為者(自己)、④私的空間・1対1・行為者(自己)、⑤私的空間・1対1・行為者(他者)、⑥私的空間・自己内・行為者(自己)の6つに分類した。

$\chi^2$ 検定の結果、内容による分類では「アルバイト・仕事」、「勉学」、「友人」が比率的に多く、「スポーツ・試合」、「発表・演技」、「部活(試合・演技・発表以外)」、「事故・器物破損」、「家族」、「公衆」が少なかった [ $\chi^2(8) = 237.739, p < .001$ ]。

場面による分類では、「公的空間・1対多数・行為者(自己)」と「私的空間・1対多数・行為者(自己)」が比率的に多く、「公的空間・1対多数・行為者(他者)」、「公的空間・1対1・行為者(自己)」、「公的空間・自己内・行為者(自己)」、「公的空間・自己内・行為者(他者)」、「私的空間・1対1・行為者(自己)」、「私的空間・1対1・行為者(他者)」が少なかった [ $\chi^2(7) = 191.75, p < .001$ ]。

さらに、それぞれの下位尺度得点を従属変数とし、内容分類・場面分類の両方について一元配置の分散分析を行った結果、内容による分類では、「恥・負債感」で有意傾向が見られ ( $F(8, 129) = 1.84, p < .08$ )、「無力感」では有意であった ( $F(8, 129) = 2.07, p < .05$ )。

多重比較(LSD)の結果、「恥・負債感」は、最もいやだった場面が「部活」や「家族」の人よりも「アルバイト・仕事」、「スポーツ・試合」、「事故・器物破損」場面の人の方が感じていた。

「無力感」は最もいやだった場面が「家族」の人よりも「アルバイト・仕事」、「スポーツ・試合」、「発表・演技」、「友人」場面の人の方が感じており、「勉学」の

人よりも「スポーツ・試合」、「発表・演技」場面の人の方が感じていた。また「友人」の人よりも「発表・演技」場面の人の方が感じていた。

場面による分類では、「劣等感」[ $F(7,130)=2.55, p<.05$ ], 「罪責感」[ $F(7,130)=2.18, p<.05$ ], 「期待・成果」[ $F(7,130)=2.43, p<.05$ ], 「評価・受容」[ $F(7,130)=3.89, p<.001$ ] が有意であった。

多重比較(LSD)の結果、「劣等感」は最もいやだった場面が「私的・1対1・自己」の人よりも「公的・1対多・自己」、「公的・1対1・自己」「公的・自己内・他者」、「私的・1対多・自己」場面の人の方が感じていた。また「公的・自己内・自己」「私的・1対1・他者」の人よりも「公的・1対1・自己」場面の人の方が感じていた。

「罪責感」は最もいやだった場面が「公的・1対多・他者」の人よりも「公的・1対多・自己」、「公的・1対1・自己」、「公的・自己内・他者」、「私的・1対多・自己」、「私的・1対1・他者」場面の人の方が感じていた。また「公的・自己内・他者」よりも「公的・1対1・自己」場面の人の方が感じていた。

「期待・成果」は、最もいやだった場面が「私的・1対1・自己」の人よりも「公的・1対多・自己」や「公的・1対多・他者」、「公的・1対1・自己」、「公的・自己内・他者」、「私的・1対多・自己」場面の人の方が気にしていた。また「公的・自己内・自己」場面の人よりも「公的・1対1・自己」の人の方が気にしていた。

「評価・受容」は、最もいやだった場面が「私的・1対1・自己」の人よりも「公的・1対多・自己」、「公的・1対他・他者」、「公的・1対1・自己」、「公的・自己内・他者」「私的・1対多・自己」の人の方が気にしていた。また、「公的・自己内・自己」の人よりも「公的・1対1・自己」の人の方が気にしていた。

### 3. 考察

“評価・受容”と“共感欲求”が“共感”に対して正の影響を及ぼし、“恥・劣等感欲求”は負の影響を及ぼしている。失敗した際、相手の気持ちを考える人や評価や受容を気にする人は、相手に受け入れられているか、評価されているかが気になるので、自分が失敗した際には、相手の気持ちを考え、相手が失敗したときにも、自分に対する評価を下げて欲しくないで、こちらの気持ちを感じて欲しいと思い、また恥や劣等感のような感情は持って欲しくないと感じていると考えられる。

“評価・受容”と“運”が“心的負担”に影響を及ぼしているということからは、評価や受容を気にするあまりに、失敗した際、精神的に辛い状態になってしまうと考えられる。また、運のように偶然に支配されることは、統制不可能で不安定なものであるため、ドキドキするなどの生理的反応が生じるのかもしれない。

“自暴自棄欲求”と“期待・成果”、“無力感”が“自己防衛”に対して、影響を及ぼすということは、成果や期待を重視しているため、下げないために、自分の責任を放棄すると推察される。また、自分の力が及ばないと感じているからこそ、自分の責任ではないと思うのかもしれない。

“運”や“能力”、“期待・成果”、“評価・受容”が、“恥・負債感”に影響を及ぼしていたことから、期待や成果、評価や受容を対人場面で非常に気にしながら、運や能力といった自分では統制不可能なものに失敗の原因を帰属するからこそ、恥や負債感を感じやすくなると考えられる。また、恥には、失敗時の無能力を感じる屈辱感と努力不足を恥じるうしろめたさの2側面があり、失敗に対する能力帰属、努力帰属とそれぞれ結びついているということが言われており(奈須, 1988)、ここで感じられる恥は、前者であると考えられる。

“評価・受容”、“無力感”、“運”、“能力”が“劣等感”に対して有意に影響を及ぼしているということからは、評価や受容を気にするが、統制不可能であるため、「どうしようもない」という無力感を感じ、失敗した際には、評価を気にして自他を比較し、劣等感を抱きやすと考えられる。

“評価・受容”、“自暴自棄欲求”、“罪責感欲求”、“努力”が“罪責感”に対して影響を及ぼしていることから、評価や受容を気にし、失敗の原因を自分自身の努力不足に帰属するので、責任を感じてしまうと考えられる。また、相手に対して責任を感じて欲しいと思うからこそ、自分自身の責任も認めるということであろう。

このようなことから、“劣等感”、“罪責感”が対人的には受け身的で、“負債感”は能動的な感情であるといえる一方で、恥ずかしい、負債感と言う感情は、能力や運のせいにしやすい人や成果や期待を大切にする人に多く、他者の思いや評価を大切に、努力のせいにしやすい人は罪責感を感じやすいとも言える。

以上の結果を、他者への自己意識的感情欲求特性が自己意識的感情特性に及ぼす影響について改めてまとめると、相手に自暴自棄になって欲しいと思う人や相手に共感して欲しいと思う人、相手に責任を感じて欲しいと思う人は、自分が失敗した際にも相手と同様の感情を抱いており、それに対して相手に恥や劣等感を感じて欲しいと思う人は、自分が失敗したときに責任を感じ、相手の気持ちに共感していないということが示されている。

また、対人場面懸念が自己意識的感情特性に及ぼす影響についてもまとめてみると、期待や成果を気にする人は、失敗したとき、期待を裏切らないよう、また、成果を少しでも残せるよう、自分に責任がないと思いたいし、また、期待に応えられないことや、成果をあげられないことに対して、恥ずかしく思ったり相手に

負い目を感じたりすると考えられる。それに対して、評価や受容を気にする人は、失敗したときに相手からの評価が下がるのではないかと、また受容されないのではないかと気になって、相手の気持ちを考え、しんどくなり、人よりダメな人間だと思って、自分に責任を感じるのではないだろうか。

帰属特性が自己意識的感情特性に及ぼす影響については、努力に帰属する人は、自分の努力が不足していたことに原因を失敗したとき自分に責任があると思い、「無力感に帰属する人は、失敗したときに、自分に非がないと考え、人より劣っていると思うと考えられる。また、能力に帰属する人は、失敗の原因を自分で変化させることのできない能力に求めるので、恥ずかしく思ったり、負い目を感じたりし、能力を重視するがために、自分が人より劣っていると感じるのではないだろうか。運に帰属する人は、自分の外に原因があると考えるので、失敗するとその状況に置かれている自分にしんどくなり、また、避けられない状況で恥ずかしくなったり、負い目を感じたりし、人より自分が劣っていると思うのではないかと考えられる。

帰属特性が自己意識的感情特性に及ぼす影響については、努力に帰属する人は、自分の努力が不足していたことに原因を失敗したとき自分に責任があると思い、「無力感に帰属する人は、失敗したときに、自分に非がないと考え、人より劣っていると思うと考えられる。また、能力に帰属する人は、失敗の原因を自分で変化させることのできない能力に求めるので、恥ずかしく思ったり、負い目を感じたりし、能力を重視するがために、自分が人より劣っていると感じるのではないだろうか。運に帰属する人は、自分の外に原因があると考えるので、失敗するとその状況に置かれている自分にしんどくなり、また、避けられない状況で恥ずかしくなったり、負い目を感じたりし、人より自分が劣っていると思うのではないかと考えられる。

自由記述の結果からは、最もいやな場面に、アルバイト・仕事やスポーツ・試合場面、事故・器物破損を挙げた人は部活場面や家族場면을挙げた人よりも、恥・負債感を感じていることが示された。アルバイトや仕事は、必ず何らかの責任が伴うため、恥や負債感を感じやすい状況であり、スポーツ場面や事故・器物破損などは、予測不可能な事態であり、なおかつ相手や仲間直接的に迷惑をかけてしまう事態であるため、継続して関わっていくことができる家族や部活の場面に比べて恥や負債感を感じやすいと考えられる。

これらのことから、最もいやな場面に、アルバイト・仕事を挙げた人は、家族場면을挙げた人よりも、無力感を感じており、スポーツ・試合場면을挙げた人は、勉強場面や家族を挙げた人よりも無力感を感じている。また、発表・演技を挙げた人は、勉強、友人、家族場면을挙げた人よりも、無力感を感じており、友人を挙

げた人は、家族場면을挙げた人よりも、無力感を感じているということが示された。アルバイト・仕事やスポーツ・試合、事故などの場面は、自分の意志とは関係なく瞬間的に起こった失敗場面であり、どんなに頑張っても挽回不可能である。それに対して家族や勉強などは、継続的な関わりの中で挽回の余地が残されているため、「頑張ればなんとかなるのでは」という期待から、恥や無力感といった感情が生じにくいと考えられる。

場面による分類では、最もいやだった場面に、公的空間で、1対多数の時に自分が失敗した場면을挙げた人は、私的空間で相手と1対1の時、自分が失敗した場면을挙げた人よりも劣等感を感じており、公的空間で、相手と1対1で、自分が失敗した場면을挙げた人は、公的空間で、自分だけの失敗をした場面、私的空間で1対多数の時に、自分が失敗した場面や、私的空間で1対1の時に、自分が失敗した場面、私的空間で1対1の時に、相手が何かしたことを自分の失敗と感じた場면을挙げた人よりも、劣等感を感じていることが示された。さらに、公的空間で、相手が何かしたことを、自分だけに関わる失敗と感じた場면을挙げた人は、私的空間で、1対1で自分が失敗した場면을挙げた人と比べ、劣等感を感じていることや、私的空間で、1対多数の時に、自分が失敗した場면을挙げた人は、私的空間で、1対1の時に自分が失敗した場면을挙げた人よりも、劣等感を感じていることが示された。

これらのことから、1対1での失敗場面よりも、1対多数の場面での失敗の方が、周囲の目がたくさんあり、周囲と自分とを比較せざるを得ない状況であるため、惨めな感情が生じやすいと考えられる。また、公的空間よりも私的空間のほうが、自分と相手との関係性が親密で、普段から相手に対して劣等感を抱いたりするような間柄ではないため、劣等感を感じたりするのかもしれない。さらに、同じ公的空間でも、自己内で失敗が起こった場合、直接比較する他者がいないため、劣等感を抱きにくいと考えられる。

罪責感については、最もいやだった場面に、公的空間で、1対多数で自分が失敗した場면을挙げた人は、公的空間で、1対多数の時に、相手が何かしたことを失敗だと思った場면을挙げた人よりも、罪責感を感じており、公的空間で、1対1の時に、自分が失敗した時に、公的空間で、1対多数の時に、相手が何かしたことを失敗だと思った場면을挙げた人や、公的空間で、自己内の失敗を自分がした場면을挙げた人よりも、罪責感を抱いているということが示された。また、公的空間で、自己内で処理される問題で、相手が何かしたことで失敗だと思う場면을挙げた人は、公的場面で、1対多数の時に、相手が何かしたことを失敗だと思った場면을挙げた人と比べ、罪責感を抱いており、私的



空間で、1対多数で、自分が失敗をした場面を挙げた人は、公的空間で相手が何かしたのを失敗と思った場面を挙げた人よりも、罪責感を感じている事が示された。さらに、私的空間で1対1の時に、相手が何かしたのを失敗と感じている場面を挙げた人は、公的空間で1対多数で相手が何かしたのを失敗と感じている場面を挙げた人よりも、罪責感を感じているということが示された。

相手が何かしたことを失敗だと思った場面は、自分が失敗したのではなく、相手に失敗させられた状態であるため、罪責感を感じないのは妥当な結果であると考えられる。さらに、自己内の失敗は、申し訳ないと思う相手がいないため、罪責感が生じにくいであろう。また、この自己内で処理される相手の失敗は、「大学受験のときに、希望大学に判定が届かなかった。」という場面であったので、1対多数の「大人数で待ち合わせをしていたが、自分の不在に気付かずに出発してしまっていた。」などの場面に比べれば、自分の非が全くないとは言いきれない状況であるため、罪責感を感じているのかも知れない。私的空間で1対1、行為者が相手の場面を挙げるということは、「友人と学校見学に行く約束をしていたのに、友人が寝坊して一人で行きかけた。」事を純粋に相手の非として捉えておらず、そういう友達と一緒にしようと思った自分に罪責感を感じてしまっているという可能性も考えられる。

期待・成果では、公的空間で、1対多数の時、自分が失敗した場面を挙げた人は、私的場面で1対1の時に自分が失敗した場面を挙げた人よりも、期待や成果を気にしており、公的空間で1対多数、相手が何かしたのを失敗と思った場面を挙げた人は、私的場面で1対1、自分が失敗した場面を挙げた人よりも、期待や成果を気にしているということが示された。また、公的空間で、1対1の時、自分が失敗した時場面を挙げた人は、公的空間で自己内の失敗をした場面や、私的空間で1対1の時、自己の失敗を挙げた人よりも、期待や成果を気にしているということも示された。さらに、公的空間で、自己内、相手の行動を自分の失敗と捉えた場面を挙げた人は、私的空間で、1対1の時に自分が失敗をした時よりも、期待や成果を気にしており、私的空間で、1対多数、自分が失敗した場面を挙げた人は、私的空間で、1対1で自分が失敗した場面を挙げた人よりも、成果や期待を気にしているということが示された。

私的空間と比較し、公的空間の方が、他者との関係が親密でなく、相手の感情を確認することも出来ないため、期待や成果を意識することが多いのではないだろうか。また相手が多いほど、期待の数も多くなるため、より期待や成果を気にする結果となったのではないだろうか。同様に、私的場面においても、相手の人数が多くなるほど、評価の目や自分の成果が問われる

機会が多くなるため、より期待や評価が気になる結果となったと考えられる。さらに、相手が何かしたことを、自分の最もいやだった場面として挙げるということは、自分自身の成果だけでなく、相手の成果も気にしているということを暗に意味しており、その成果に期待した自分自身もかなり意識されていると考えられる。そして、自己内の失敗は、期待も成果も、公には分からないので、あまり意識されることがないのかも知れない。

評価・受容では、最もいやだった場面に、公的空間で、1対多数で、自分が失敗した場面を挙げた人は、公的空間で自己だけの失敗をした場面や、私的空間で、1対1の時、自分が失敗した場面を挙げた人よりも、評価や受容を気にしており、公的空間で、1対多数で、相手がしたことを失敗だと思った場面を挙げた人は、私的空間で、1対1で、自分が失敗した場面を挙げた人よりも評価や受容を気にしていることが示された。また、公的空間で、1対1で、自分が失敗した場面を挙げた人は、公的空間で自己だけの失敗をした場面や、私的空間で1対1の時に、自分がした失敗場面を挙げた人よりも、評価や受容を気にしているということが示された。さらに、公的空間で、自己内、相手のしたことを失敗だと思った場面を挙げた人は、私的空間で1対1の時、自分がした失敗場面を挙げた人よりも、評価や受容を気にしており、私的空間で1対多数の時、自分の失敗場面を挙げた人は、私的空間で、1対1、自分の失敗を挙げた人よりも、評価や受容を気にしているということも示された。

評価や受容についても、期待・成果と同様に、私的場面では他者との関係が親密でなく、相手の感情を確認することも出来ないため、公的場面でより意識されることが考えられる。また相手が多い状況ほど、他者からの評価の目も多くなるため、より評価を気にする結果となったのではないだろうか。そして、また、同様に自己内の失敗よりは自分だけで処理されるため、評価や受容を気にする機会も必然的に少なくなると考えられる。しかし、評価や受容を気にするあまりに、相手が何かした場合でさえも、自分の失敗として捉えてしまうということが、期待や成果との違いであると考えられる。

本研究では、パーソナリティ特性としてネガティブな自己意識的感情を捉え、その生起要因も含めて明らかにすることを目的としていた。新たに作成した自己意識的感情特性尺度では、6つの因子が抽出されたが、これは、菊池・有光(2002)らがシナリオ形式で測定した尺度による因子分析の結果(対人的負債感・個人的苦痛・罪責感・恥・役割取得・共感的配慮)とは、若干異なるものであった。特に、役割取得と共感的配慮の区別が明確にならなかったのは、これらの違いが、具体的場面を用いなかったことによって意識されなかった

ことにあると考えられる。確かに元々自己意識的感情は同時に感じられることが多いため、類似した感情の場合、区別して意識されにくい。特にこの2つの感情は、相手の立場に立つだけか、相手の気持ちに共感するかという非常に繊細な問題を扱っているため、具体的な場面を離れては、区別することが困難であったと考えられる。だが、その他の感情は、おおむね別の感情として捉えられており、同時に感じている感情とはいえ、具体的な場面を離れたとしても、それぞれ区別して感じられているということも明らかとなった。また、このように場面の要素を排除したことで、感情の生起傾向としての評定を求めることができ、特性としての自己意識的感情を捉えることができたのではないだろう。

しかし、場面が与える影響を排除し、場面をネガティブな自己意識的感情が生起しやすいと考えられる「失敗場面」としてのみ設定しても、やはり、自由記述で様々な失敗場面が挙げられたことからわかるように、評定者がどのような失敗場面を想定し、評定を行ったかによって、場面の要素が影響を与えていないと言い切ることはできない。だが、今回実施した自由記述の分類から、失敗の内容や、失敗の起こった空間、相手、また、行為者が誰であるのかなど、場面の具体的な要素も明らかになってきたことも確かである。個々にとって、それらの要素がどのような意味を持つのかについては、十分に検討していく必要がある。

特性として自己意識的感情を捉えようとした今回のような試みでは、場面ごとのナイーブな感情は測定で

きないかもしれない。しかし、本研究ではそもそもこうした自己意識的感情を持ちやすい人がおり、そうした自己意識的感情が何を要因として生じやすいのかという傾向を明らかにすることが出来た。また、このような傾向を明らかにしたことで、特性としての構造が明らかになり、場面における他の感情が付随的・特異的であることを逆に推定することも可能となった。さらに、こうした感情の生起モデルを作ったことは、隣接する思いやりやプライド等の対人場面での感情のメカニズムを明らかにし、そうした感情のコントロールや育成にも貢献できるであろう。

#### 引用文献

- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 菊池章夫・有光興記 2006 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 137-148.
- 奈須正裕 1988 Weinerの達成動機づけに関する帰属理論についての研究 教育心理学研究, 37, 84-95.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. 2002 *Shame and Guilt*. New York: The Guilford Press.
- Tangney, J. P., & Fischer, K. W. (eds.) 1995 *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: The Guilford Press.
- Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S. & Rosenbaum, R. M. 1971 *Perceiving the causes of success and failure*. In E. E. Jones, D. Kanouse, H. H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins & B. Weiner (eds.) *Attribution: Perceiving the cause of behavior*. General Learning Press.